

のうぜんのだつさり散つて花盛り 山田真砂年

〔俳壇〕十月号「八月や」七句より

こういう句に対しては、芭蕉の言う「行きて帰る」は、やはり鉄則だなと思わせられる。「どつさり」というおよそ花には似合わない、雑な擬態語をあえて使っておいて、これが「のうぜん」の「花盛り」だねという写生と諧謔なのである。中七の最後の切れを「て」で散文的に詠むのは危険な行き方でもある。無造作に詠むと報告になつてしまうからだ。しかし、「どつさり」の促音を受けるには、「散つて」というやはり促音で受けるのがいいし、この「のうぜん」を漢字で書いてしまったら、暑苦しくていけない。無造作に詠んだように見えて、細やかな配慮が行き届いた上品なユーモアが「行きて帰る」「軽み」ではないのかと思えてくる。